

# 心豊かに生きる

公開シンポジウム  
「美しい生き方を考える」シリーズ

第3回

公益財団法人 花王 芸術・科学財団  
<http://www.kao-foundation.or.jp/>

# 心豊かに生きる

公開シンポジウム  
「美しい生き方を考える」シリーズ

第3回

2014年12月8日(月) 18:00 ~ 20:00

日本橋三井ホール  
(東京都中央区日本橋室町2-2-1 COREDO 室町5F)

主催 公益財団法人 花王芸術・科学財団

## 目次

基調講演 (P2~P11)

### 「心豊かに生きるための心構え」

哲学者・前大阪大学総長・京都市立芸術大学学長・せんだいメディアテーク館長

鷺田 清一

パネルトーク (P12~P23)

鷺田 清一・小池 一子・原島 博

コーディネーター 酒井 ゆきえ

## 「心豊かに生きるための心構え」

哲学者・前大阪大学総長・京都市立芸術大学学長・せんだいメディアテーク館長

鷲田 清一



### 「心豊か」とはどういうことなのか？



こんばんは。先ほど京都から参りましたが、東京はあったかくてホッとしました。「美しい生き方を考える」シリーズの最終回にお招きいただきまして、どうもありがとうございます。

私、3年ほど前に大阪大学の総長職を辞したわけですが、総

長になりました当初、ちょっとなじめない習慣がありました。それは、入学式とか卒業式のときに、中世から続くイタリアの大学と同じマントを着て、帽子をかぶらなければいけないんです。あの出で立ちにはなじめなかったですね。

そして、その出で立ちで卒業生の皆さんにお話する時に、「うわー」と、腹の底からこみ上げるものもありました。それは何かといいますと、帽子には長い房がついていて、顔を揺さぶるたびに、その房の先がふっと顔に触れるんです。その時に、高校時代の自分を思い出したんです。私、高校時代は長髪で(笑)。あの頃、毎日、髪がふっと顔に触れていたことを突然思い出して、何十年ぶりかの感触を感じて、胸に強く込み上げるものがあったことを覚えています。いまではこういう髪なき髪型になってしまいましたが… (笑)。

「見目麗しくあるためには、どうしたらいいか」について、私にはもはやお話しする資格はありませんが、「心豊か」だったら話せるんじゃないかということで、今回もお招きいただいたのではないかと考えております(笑)。いまの話、冗談で言っているのではなく

て、実はこれからお話しすることに深く関わっています。

「豊かな暮らし」と考えると、心温まる家庭生活であるとか、美しい自然に囲まれているとか、余裕があるとか、さまざまな情景が思い浮かびます。けれど、「心豊か」と考えた時は、意外と難しいです。「心の豊かさ」というものは、「暮らしの豊かさ」ほどには単純ではないような気がします。気持ちの中身が濃いというか、命が大きく呼吸しているというか、何かそういうイメージが、私の中には「心の豊かさ」としてあります。

「気持ちの中身が濃い」とは、必ずしもいいことばかりではありません。幸福感に満たされているとか、希望があるとか、心地よいとか、そういうものだけではなく、深く傷つたことがあるとか、捨てられない思い出があるとか。痛いもの、せつないものも含めて、私は「心の豊かさ」というのではないかと思うんですね。

### 激痛は、人をいまここに閉じ込める

20年くらい前、日本のホスピス医療の先駆者でもあります柏木哲夫先生とお話しする機会がありました。末期がんで苦しんでいらっしゃる方が激痛に襲われていますと、ホスピスでは、治療ではなく緩和ケアというものをされるわけです。「どうして緩和ケアが必要なんだろう」という話題になった時、私が、私にとってはすごくリアルなことです。突拍子もないことを申し上げました。

「激痛っていうのは、人を、いまここに閉じ込めてしまう。人の気持ちをここから離してくれない。だから、激痛というものを遠ざける必要があるんだ」と。たとえば「疼き」でしたら、昔に大けがをしたり病んだりして完全に治癒できていなくて、ちょっと気圧が下がったり、ちょっと湿度が上がっただけで、古傷が疼くということがあります。心の傷も、「トラウマ」と言ったりします。体の傷も心の傷も、普通の傷の場合は過去を引きずっているところがありますが、激痛に襲われた時というのは、昔のことなんか思い出している心の余裕がないんです。明日のことも、とても考えられません。

このように、人の意識が、現在にギュッと閉じ込められてしまうんですね。このことによって、人は希望というものと無縁になるんです。「将来、こんな暮らしをしたい」「将来、こんな人と出会いたい」「こんなものを食べたい」といった希望は、苦痛の中にある時にはちっとも考えられないし、昔の楽しかった思い出に浸ろうなんていうことも、絶対にできません。「今の苦痛から逃れたい」。それしかないわけですね。これは、希望や思い出だけではなく、不安すらも覚えぬ。将来のことなんて考えられないから、不安もなく、過去のことについての後悔というものすら、もはや意識にのぼってこない。

このように、激痛は、人を現在に閉じ込めてしまうことで、希望と不安、よき思い出と悔

恨という極めて人間的な思いを不可能にしてしまうんです。「激痛が、私をここに閉じ込める」ことは、「世界をいまここにしか、感じられなくなる」ことなんですね。他人を思いやるとか、他人に思いを寄せるとか、他人の気持ちになるといった、自分をよそに移し替えるという余裕がまったくなくなってしまいます。いまここでしか、世界を感じられなくなるということなんですね。つまり、希望も不安も思い出も悔恨も不可能になり、他者への思いやりも共感も持つ余裕がなくなる。人であるために一番大事なもの、あるいは本質的なものをいくつか不可能にしてしまうのが、激痛というものなんですね。

「だからこそ、激痛をやわらげる緩和ケアが必要になるのではないですか?」ということを申し上げました。柏木先生は、「そんなふうに考えたことはなかったけれど、なるほど」と、深く頷いてくださいました。

私は、「心豊か」ということは、中身が濃いことではないかと思っています。心地よいものもよくないものも含めて、いまここから、未来へ、過去へ、あるいは他の人たちへと、広い心をたなびかせる中身の濃さです。このことが、人としての心の豊かさにつながるのではないだろうかと思うんです。

### 古い都市にある3つの装置

古い都市に行くと、心の豊かさを育んでくれる装置がたくさんあります。私は、ニュータウンにはなくて古い街にある装置を、大まかに3つ考えます。1つは大木です。土地を造成してつくるニュータウンにあるのは、基本的には新しく植樹した木なので、大木はありません。もう1つは寺社などの宗教施設ですね。ニュータウンは、最近ちょっと変わってきましたけれど、以前は特定の宗教施設を許してはいけないということで、お寺とか神社とか教会とかは建てにくかったですし、葬儀場はいつも無宗派が建っています。そして、3つ目が場末だと思います。ニュータウンに、わざわざ危ない場所、アンダーグラウンドにつながるような場所をつくるわけにはいきません。

では、古い都市にある3つの装置はどういう働きをしているのでしょうか。まず樹齢何百年もの大木です。私たちが時間、あるいは時代というものを考える場合、過去にさかのぼっても、せいぜいおじいちゃんの時代ぐらいしか、リアルには感じられません。あまり遠い先までは考えられないですけど、大木というものに囲まれて過ごしていると、おじいちゃんの代までの時間感覚よりもうーんとスケールの大きな時間、長いタイムスケールの中で、いまを感じることができます。つまり、現代の向こう側にあるものから感じるものが促されるのです。

宗教施設はどうでしょうか。宗教施設では、この世をあちら側から見ます。それは神の

国かもしれないし、あの世かもしれない。要するに、私たちがこの世の価値観で、「幸福とはどういうことか」「喜びとは何か」「正しいとはどういうことか」と、当たり前だと思っていることを、彼岸のほうから、あるいは天のほうから見ると、多くの場合、違う価値観になります。違う価値観で、私たちのこの世界を照らしてくれる。これもやっぱり、向こう側からの視線なんですね。

最後に、場末。これは、世界を裏側から、闇のほうから照らしてくれる装置です。いつも、脅えとともに見えない、闇の存在を感じさせてくれる装置。それは、社会の闇かもしれないし、一人ひとりの心の奥底にある闇かもしれません。そういうものから、いまの意識している自分を見るという、そういう視線を育んでくれるんですね。

古い都市にある大木、寺社、場末という装置は、この世界を完結したものとしなくて、この世界からその外へ出ていく穴のようなものです。穴から世界の外に出て、向こう側から自分たちがいる場所を見ることができる。私は、いまの世界を分厚く立体的に見せてくれる仕組みとして3つの装置があり、これらはとても大事なものではないだろうかと思います。



### 「華やぎ」と「安らぎ」から豊かさを考える

清濁を織り交ぜて、楽しいことから苦しいことまで含めて、中身が濃いということ。「心の豊かさ」というふうに考えていった時に、その概念について、「華やぎ」と「安らぎ」という2つの言葉を思いつきました。

京都を語るときのキーワードは、ずっと「伝統」と「革新」の両輪でした。一方に分厚い伝統があり、他方には前衛芸術とか前衛思想とか科学の最先端とか、共産党があるという。それが自慢でしたが、私が京都市基本構想の起草委員長になった時、「伝統」と「革新」という言葉を使わずにそれを書こうとしました。その時にみんなで考えたのが、「華やぎ」と「安らぎ」です。この2つの言葉から、「心豊かに生きる」ということを考えてみたいと思います。

「華やぎ」には、それぞれの存在がそれぞれに花を咲かせているという百花繚乱のイメージがあると思います。赤い花もあれば黄色い花もある、いろんな種類の花がいろんな色で咲き誇っているイメージの百花繚乱です。これを別の言葉にすると、「複数の可能性、あるいは多様な可能性に人が開かれている状態」と言ってもいいかと思います。

私が百花繚乱という言葉で思い出すのは、昔、私が高校に通っていた時の先生方です。全員がまったく違うお人柄でした。たとえば物理の先生は、教育に熱心なんですけれども、生徒を愛してとか、「生徒にこれを教えてやろう」ではないんですね。自分が前の晩にパーフェクトにつくった授業の資料をみんなに配る、その喜びなんです。ものすごくナルシスティックに、ニターッと笑って配られる。僕らの顔なんか、全然見てくれません。黒板に物理の数式を書く時も、僕らのほうはまったく見ずに、ニターッと書いていらっしやる。「自分のパーフェクトなスタイルを、こんなにナルシスティックに愛する人がいるのか」と、感心しました。

日本史の先生は、三つぞろいのスーツをきちんと着て、よどみなく日本史を語ってくださるんですが、生徒たちの目は、黒板にも先生の顔にも行かなくて、先生の腰に行っていました。「ピシッとしたスーツを着てるのに、なんでベルトのバックルだけがハゲハゲなんやろ？」と(笑)。すごいミスマッチなんですね。ほかの先生に聞きましたら、「あれ、三校のバックルなんや」。京都大学の前身の第三高等学校卒業というすごいエリートの微なんですよ。それを支えに生きていらっしやるんです。「ほお、こんなしょうもないことで、人の人生って支えられるのか」と思いましたね。

国語の先生は、文学が好きをやつとしかしゃべらなくて、エリート集団みたいなその子らを家に連れて帰って、深夜まで文学談義をする先生でした。一度だけついていき、部屋全部が本棚というのにびっくりしました。美術の先生は、忌野清志郎の「僕の好きな先生」とまったく一緒に、職員室が嫌い、タバコをパカパカとアトリエで吸っていらして。とか、例を挙げるとキリがない。要するに、みんな違うんです。

それぞれの先生が、自分のポリシー、大事にされていること、こだわっていらっしやるのが、全部違うんですね。「すごい！」と思えることもあれば、「あんなことを支えにしても、人って生きていけるのか」「あんなんでも、学校では通用するのか」とかですね。プラスマイナス関係なしに、いろんな価値っていうものがあって、それにはすごいものもあるけれど、しょうもないものもある。でも、そんなんでも人を支えることができるんだっていうことを、学べたんですね。

自分が育ってきた家族や地域にはいない大人たち。これまで知っていた、身近で接触していた大人とは全然違う価値を軸にして生きているいろんな大人の生き方を、その

背中を通して見られたということが、一番の財産になっていると思うんですね。苦境に陥って、前途がまったく見えなくなった時でも、「ああー、あんなんでも生きられたなあ」というね。

そういうふうにと考えると、「華やぎ」という意味での「心の豊かさ」は、生き方の一つの可能性に縮こまらないで、あるいはみんなと同じ生き方に閉じ込められないで、それぞれがいろいろな多様性にかかれている。一人ひとりが別の価値というものを体現している。そして、一人の人間の中でも、自分の中に対立する複数の価値軸を持っているということが、本当の豊かさということではないだろうかと思います。

50代ぐらいになったらわかるんですが、50代になってもモテる人は、大体、元やんちゃ。つまり、中学時代から複数の人生、複数のネットワークを渡り歩いてきた人たちだと思うんです。やんちゃの人っていうのは、会社を定年になっても、お付き合いをする人がいっぱいいるんですよね。だから、いつまでも楽しい。そういう、複数の可能性を捨てていないっていうことが、「華やぎ」の一つだと思います。

それと、そういう人は、自分が持っていない別の可能性にも関心を持ち続けているんですね。だから、自分の関心から離れる人の話に対して、聞き上手なんです。つまり、いろんな可能性にいつも開かれていて、少年のような気持ちを失っていない。人の話を「しょうもない」と決めつけずに、「ほおー、いろんな感じ方であるもんやなあ」と、いくらかでも人の話を聞いてあげることができる人。そういう人って、「カッコいいなあ。豊かやなあ」と思います。

豊かな人というのは、「未熟」を持ち続けている人。未熟って、世の中の荒波にもまれたら捨てざるを得ないものだけけれど、自分の中の未熟なものを守るためにこそ、きちっと成熟している人。つまり、「自分の中に未熟を隠し持った、成熟した人」というのが、分厚い感じ、中身が濃い感じというふうに思います。

モテる人は、同時に、子どもからあこがられる人でもあると思うんです。私が高校の先生を、苦手ではあっても嫌いではなかったのは、その人の中にいろんな矛盾、あるいはアンバランスなものがあったから。そういう、どこかいびつなもの、未熟なものを大事にするためにこそ、成熟している。そういう大人っていうものには、すごくあこがれました。

極めつけは、数学の先生です。ものすごい学究派で、職員室でも群れずに、フランス語の原書ばかり読んでいて。宿題をやっていなくても、絶対怒らないで、淡々と授業されているタイプの先生でした。その先生の車の後部座席には、いつも数学の原書が置いてあるんですが、ある時、その中にお経を見つけてしまったんです。「え？ あの合理主義者がなんでお経？」と。

何日かしてからほかの先生に「車にお経が入れてあったけど、何か信仰していらっしゃるんですか？」って聞いたら、「お前、何も知らなかったんか？ 実は何週間か前に息子さんを亡くされたんよ」と言われて、びっくりしました。クラス全員、誰もそのことに気づかなかった。もちろん先生は、休講もされなかったんですね。で、淡々とした授業をずっとされていました。でも先生、あのお経がなかったら、身を保ち続けられなかったと思います。一人の大人の中で、破裂しそうなぐらいの葛藤があったということを知って。あれが、私にとっての、大人のイメージの原型なんです。すごいと思いました。あこがれました。そういう大人っていうものに。

学校で勉強する教科内容で、大きくなってから本当に役に立つものなんて、ほとんどないじゃないですか。でも、先生の背中が、僕らにもすごく大事なことを教えてくれた。そのためには、違う価値観が複数必要なんです。こっちではもう生きられなくなった、生を断念せざるを得なくなった時に、もうそれで終わりだと思わないで、「そういえば、こんな生き方もありだなあ」というふうに、いくつもの可能性に触れられるということ、身を開けるということが、豊かということ。「華やぎ」の意味ではないかなと思います。

次に、「安らぎ」です。この言葉はありふれていて、現代社会では「安心安全」に言い換えられますね。安心安全は大事ですが、「豊かさ」というものとは、なかなかつながりにくいです。

「代わりがいる」という言葉は、一般にはネガティブな意味に使いますよね。「お前の代わりなんて、いくらでもいる」と。こういう言い方で「代わり」という言葉を突きつけられることは、現代社会には多いです。スキルのトレーニングをする余裕が会社になくなっていたり、マニュアルを読んだらできるような単純作業に人々を移していくような、こういう時代の中で、ちょっと文句を言ったら、「あなたの代わりなんて、いくらでもいる」と言われること。実際に言われなくても、そういう情景がイメージしやすい時代になっています。私はこれを、「代替可能性」と呼んでいます。別の人で「代替」できることです。

でも私は、「代わり」という言葉には、これとは正反対のすごく大事な意味があると思います。たとえば「名代」という言葉があるで

しょう。自分が大事な交渉の席に行けない時に、「この人の言葉を私の言葉だと思ってくれ」と、名代を差し出すわけです。これは、100%信頼されている「代わり」なんですね。これを私は、「代替可能性」ではなく、「代理可能性」というふうに呼びたいと思います。「お前の代わりなんて、いくらでもいる」という言葉と対比して、「お前ができないのなら、誰かが代わりにやってくれるよ」という言い方です。

私は、「安らぎ」というのは、「いつでも誰かが代理をしてくれる」という安心感ではないだろうかと思うんです。自分が万が一病気になったり、大けがをしても、誰かが代わりにやってくれる。だからいまは、先のことを心配せずに、全力を出せるということです。

子育てだってそうです。いまの若いお母さんが苦しいのは、一人の人間が別の一人の人間の面倒をそっくり見るという、本来人間には絶対できないことをさせられているからなんです。むき出しの人間に一人で向き合った時、24時間なんて、絶対にもちません。1、2時間で十分です。昔は、お母さんと子どもの二人だけで孤立している状況というのはめったになくて、いつでもまわりからいろんな手が出てきました。「ちょっと代わってあげよう」とか、「お母ちゃん、こわいなあ。こっちにおいで」とか言って、隣のおばちゃんが引き取ってくれました。まわりに手がいっぱいあったんです。

お葬式をする時も、屋根の葺き替えをする時も、当たり前のように、まわりから手がびゅっと出てきた。「お前らだけでできないんだったら、いくらでも代わりはいるよ」と、どこかから手が出てくるという安心感がありました。私はこれを、「インターディペンデンス」と呼んでいます。直訳すると、インターナショナルの「インター」と、依存という意味の「ディペンデンス」。「お互い様」ということです。お互いに世話をし合う、頼り合うことを「インターディペンデンス」。独立という意味の「インディペンデンス」の代わりに言っています。「インディペンデンス」は、自分以外の人に「ディペンデント」でない、依存していないという意味です。

日本社会でも、自立ということがすごく言われるようになりました。私はその時に多くの人が、「自立とは、人の助けを借りないで生きられること」というイメージを持ったと思うんです。でもそんなこと、人間には絶対にあり得ません。「お金があれば、なんでもできる。サービスも買ったらいい」と言うかもしれませんが、つくってくれる人や運んでくれる人がいるから、お金で買えるわけです。だから、厳密に言えば、インディペンデンスなんか、人間にはあり得ないんです。

大事なことは、自分が何かできなくなった時に、いつでも、「インターディペンデンス(=お互い様)」と、手を差し伸べ合う、そういうネットワークをいつでも用意できているということ。これが「安らぎ」ということではないかと、私は思っています。



## 自前のセーフティーネット

私、昔から「ファッションの哲学」を勉強してきました。皆さんもご存知のように、日本のファッションを世界のトップレベルにしたのは、高田賢三さん、三宅一生さん、川久保礼さん、山本耀司さんといった、いま70代の人たちですね。あの世代に、世界をあっと思わせるようなクオリティの高い、冒険的なデザイナーがそろいました。しかし、その次の世代がなかなか出てきませんでした。

それが最近、30代に優秀なデザイナーがそろってきています。名前を挙げると、アンリアレイジの森永邦彦さんとか、リトゥンアフターワーズの山縣良和さん、matohuの堀畑裕之・関口真希子さんとか。彼らの行動様式は、40年近く前の世代とはまったく違います。有名になっても世界制覇というような野心を持たず、ショップを構えたのもついこの間だったり、広告を打ったこともなかったり。

「なぜ？」と思った時に、ふと気がついたのは、いまの30代ってどういう世代かということ、小学生の頃にバブルの崩壊を経験している世代なんです。ということは、彼らの世代は思春期以降、一度たりとも右肩上がりを皮膚感覚として持っていないんです。つまり、「明日は今日と同じか、ひょっとしたら悪くなるかもしれない。明後日はさらにひどくなるかもしれない」という感覚の中で生きてきた世代です。そして彼らが20代になった時には、首相が毎年代わるような頼りない政治が続き、不況が20年近くも続き、そしていまはさらに状況が悪くなっています。

そんな中、いま30代の彼らは、「インターディペンデンス」のネットワークを自前でやらなければいけないという感覚になっていると思います。自分たちで、仲間で、まさに手を出し合う関係です。こういうインターディペンデンスのネットワークのことを、私は

自前のセーフティーネットと呼んでいます。セーフティーネットは、これからは自分で作らなければいけないという。そういう感覚の世代が出てきているのではないだろうかと思ひ、このことは、ものすごく大事なことだと思っています。そして、本当の安らぎとは、そういうものだと思います。



これからの、否が応でも社会が縮小していく時代、国にセーフティーネットをつくる財政力がなくなっていく時代には、自前でセーフティーネットをつくるしかありません。社会が縮小していく時に一番大事な人は、右肩上がりの時代に「行け！行け！」と前進していったリーダーではないんです。「これは無駄だからやめよう」という、かつてのリーダーが一番苦しい作業ができるリーダーです。そして、選択や撤退による犠牲が、偏った業界や個人に集中しないように、転職をうまく促すとか、利率をうまく確保するとか、いろいろなセーフティーネットを用意してあげられる、あえてカッコつきのリーダーが必要になってきます。そのイメージは、旗振り役ではなく、しんがりです。

登山のパーティで、一番屈強な人は、先頭には立たないで、しんがりにつくんです。なぜ最後尾にいるかということ、そのしんがりだけが全メンバーの様子を見ることができるからです。「誰か疲弊していないか」「息切れしていないか」を見る人です。で、リーダーの次に屈強な人が先頭に立ち、ペースを決めていくんです。一番体力のない人や経験のない人が2番手につき、先頭の人は、背中で「息があがっているなあ」「そろそろペース落としたほうがいいかなあ」「休憩したほうがいいかなあ」と判断します。

でも、この先頭の姿を含め、全体をケアできるのは、一番後ろの人です。その人は、誰かが落ちてきたら助けてあげられる力がないといけないうことですね。これからの、本当の意味での「華やき」と「安らぎ」がある暮らしというものを、我々がこれから工夫してつくっていく時に一番大事なものは、先頭を行くリーダーではなくて、むしろ、しんがりという務めを果たせる人なんです。しんがりマインドを持った人が少しずつ増えていく社会が、本当の意味での「心豊かに生きるための心構え」ではないかというふうに思います。どうもありがとうございました。



鷺田 清一  
(哲学者・前大阪大学総長・京都市立芸術大学学長・せんだいメディアテーク館長)

1949年生まれ。京都大学文学部哲学科卒業、同大学院文化研究科哲学専攻博士課程修了。関西大学教授、大阪大学教授、大阪大学大学院文学研究科長・文学部長、大阪大学理事・副学長、大阪大学総長、大谷大学教授を経て、2015年4月より京都市立芸術大学理事長・学長。専攻は哲学、倫理学。日本倫理学会会長、国立大学協会副会長、文部科学省文化審議会委員、日本芸術文化振興会評議員などを歴任。現在は、せんだいメディアテーク館長、アートミーツケア学会会長ほか、京都賞、サントリー学芸賞、大佛次郎賞、河合準雄学芸賞、和辻哲郎文化賞などの選考委員も務めている。

1989年サントリー学芸賞受賞「分散する理性」「モードの迷宮」、2000年第3回桑原武夫学芸賞受賞「聴く」ことの力」、2012年第63回読売文学賞評論・伝記賞受賞「ぐずぐず」の理由」他、著書多数。

## パネルトーク

コーディネーター  
酒井 ゆきえ

パネリスト  
鷺田 清一・小池 一子・原島 博



**酒井** パネルトークを始めさせていただきたいと思います。まず、パネリストの皆さまをご紹介させていただきます。第1回「未来につなぐライフスタイル」でご講演、コーディネーターを務めてくださいました小池一子さん。第2回「自然・人・文化のつながりの中で生きる」でご講演、コーディネーターを務めてくださいました原島博さん。ただいまの第3回「心豊かに生きる」で基調講演をいただきました鷺田清一さん。皆さま、どうぞよろしくお願いたします。

また本日は、「美しい生き方を考える」シリーズの総括という意味もございますので、第1回、第2回にどのようなお話が展開されたのかについて、うかがってまいりたいと思います。小池さん、第1回にはどのようなお話の展開があったのかをご紹介

いただけますか。

### 第1回「未来につなぐライフスタイル」

**小池** 第1回「未来につなぐライフスタイル」では、私からプロローグとして「日本の美というものは四季を前提にしてあり、この日本列島から生まれてきたものである」というお話をさせていただいてから、東北大学大学院教授の石田秀輝さん、美術作家のやなぎみわさんのご講演があり、そのあと3人でパネルトークを行ないました。

石田さんは技術の世界を極められ、あらためて「自然から何を学ぶか」をテーマに、自然のすごさを科学技術に応用することで、環境に負荷をかけない新しいライフスタイルというものを研究されるなど、目覚ましい活動をされています。科学技術の立場から提案をなされ、たとえばアートが縦糸であるとしたら、自然科学は横糸であるというようなお話を中心に組み立てられました。

やなぎさんは、自分の体を使って行なうパフォーマンスアートという表現活動で、演劇やダンスの領域にも入っていらして、ダイナミックな演劇活動を展開していらっしゃいます。やなぎさんのお話は、今までの日本の文化の中から女性の力を研究し、それを表現に変えていくことでした。たとえば、若い女性が老婆のメイキャップをして表現の世界をつくるというようなことです。芸術の力が、私たちのライフスタイルにどんな影響を与えることができるか、どんな切り口を開くことができるかをお話いただきました。

パネルトークでは、「未来につなぐライフスタイル」について、突き詰めて話をさせていただきましたところ、「確かな未来は懐かしい過去にある」ということにたどり着きました。つまり、過去に学びつつ、そこから確かな未来を切り開いていくという、そういう方向に向いていったと思います。

**酒井** ありがとうございます。いまお話しいただいた内容は、今回の「心豊かに生きる」にも、きっとつながってくるのではないかなと思ひながら、拝聴いたしました。続きまして原島さん、第2回の流れについてお話しいただけますでしょうか。



## 第2回「自然・人・文化のつながりの中で生きる」

原島 第2回のコーディネートを担当いたしました原島でございます。昨年の11月29日、この会場で開かせていただきましたテーマは、「自然・人・文化のつながりの中で生きる」。「つながり」がテーマでございました。建築家で東京大学名誉教授の内藤廣さんに基調講演を、地域再生の仕事をされている牧大介さん、写真家で花王芸術・科学財団の評議員でもある織作峰子さんにミニレクチャーをお願いし、そのあと全員でパネルトークを行ないました。

基調講演の前に、私からプロローグとして問題提起をさせていただき、「ヒトとチンパンジーはどこが違うか？」という話から始めました。広い意味では、ヒトとサルですね。DNA がほんの1%ぐらいしか変わらないといわれていますが、私はその違いは「つながりを持って生きてきた」ということだろうと思います。

人類、我々の祖先は、よせばいいのにサバンナという厳しい環境に飛び出してしまった。そこで猛獣が襲ってきた時には、共同で、つまり人と人とのつながりで対抗するというのを武器に、生き延びてきました。また、創意工夫をして文化をつなげていくという形、文化の伝承という形でも生き延びました。まさに、自然、人、文化のつながりの中で生きてきたということが、ヒトとサルの大きな違いだろうと思うんですが、近代になって、人はそれを捨てようとしているのではないかと、問題提起をさせていただいたわけです。

助け合いを、お金でアウトソーシングしてしまう。安心安全も、育児も、税金で行政にアウトソーシングして、自分たちでやるものではないみたいなどころもある。文化のつながりも、昔はおじいさん、おばあさんから学んだけれど、いまはそういうつながりがなくなってしまったわけです。「それでいいのか？」というような質問を最初にさせていただきました。

そのあとの内藤さんの基調講演で印象的だったのは、「1960」という謎のスライドです。1960年ということなんですけどね。1960年は日本の高度成長が始まった年で、



今日の鷺田さんのお話にもあったように、まさに右肩上がりに成長してきたけれども、2005年くらいから人口も減り始めています。でも、いまだに1960年型の自動車ですら走ろうとしているところがある。従来のやり方で大丈夫なのか？ 震災の復興も、1960年型の自動車の考え方で本当にやっていけるのだろうかというような問題提起がありました。新しい考え方が、我々に問われているということです。

それを受けて、そのあとのミニレクチャーでは、岡山県の西粟倉村で地域再生のお仕事をされている牧大介さんから、その取り組みの紹介がありました。過疎の再生を、まさに自然、人、文化という形で実践されているというお話の中で、そこに参加されている一人ひとりの写真が紹介されたんですが、それぞれの方が本当に生き生きとしているのが、印象的でした。

織作峰子さんは、スイスの本当に美しい風景を紹介されました。私は、自然、人、文化ということに見入ってしまいましたが、そこでも風景だけではなく、一緒に人が写っている。人がいて、まさにその人たちが自然に生かされているというのが、印象的でした。自然を守り、自然から学ぶところに、つながりができ、これからの文化があるのではないかというお話でした。

最後に、会場からのご質問に答える形になりました。今回の鷺田さんのお話ともつながると思いますが、まさに転換点にあるいま、もう一度、懐かしいものを考え直す必要がある。では、どのような形で前に進んでいくのか？ 従来型ではなく別の形でやっていくということと、自然に対しても、自然に感謝するという気持ちが重要ではないかということをお話しました。

酒井 ありがとうございます。いまお話をうかがって、本日のテーマにつながるところが非常に多いと感じました。原島さんがおっしゃったように、ヒトとチンパンジーの違いは、共同生活をするということで、この「つながり」を武器に、私たち人間は生きてきたのだと思います。鷺田さんは、いかが思われますか？

## 共に食べ、「つながり」の中で人は生きてきた

鷺田 サルとかゴリラとかチンパンジーが同じ地域に住んでいて、共存するためには、食物の奪い合いにならないよううまく棲み分けないとはいけませんよね。「我々は実を食うから、お前たちは根っこを食え」とかね。うまく棲み分けることで、それぞれの個性が出てくるんですよ。

人間をおサルさんと区別する時の「共同で」ということが一番よく表れているのが、食事ですね。人間は、食べ物を見つけると、その場では食べずに持って帰ってから食べる。



その場で食べられる以上を持って帰る。持って帰ったものをみんなで分けて食べる。この3つの特徴があります。これが、人間を他の類人猿と区別しています。共食、共に食べるということは、たしかに人間だけの特徴です。

ところが、昔からの研究仲間で、昨年から京大の総長になられた山極寿一さんが、おもしろいことをおっしゃられました。「鷺田さん、ちょっとやばいですよ。人間、サルに退化しつつありますよ」。久しぶりにファーストフードショップの前を通りかかった時に、「ギョッとした」と。若い人がカウンターに行って、自分が食べられる分だけももらって、横のテーブルでチョチョチョッと。これはサルの食べ方だと。「危ないよ、鷺田さん」って(笑)。

人間というのは、「一緒に」ということが大事なんです。だからみんな、コンパが好きなんです。しゃべりながら、一緒に食べるということが大事です。会社はカンパニーっていうでしょう。コンパとまったく同じ言葉です。カンパニーって、英語では仲間とか同胞って訳します。コンパやカンパニーの「コン」は、「一緒に」ということです。「パニー」というのは「パン」のことなんです。食事のことです。だから、「カンパニー」のもとの意味は、共食なんです。たぶん比喻でしょうけど、食いぶちを一緒に稼ぐという。一人で仕事をするよりリスクが大きいから、グループでやる。一人がミスしてもみんなで埋め合わせられるから、安心して冒険できるじゃないですか。だから、「会社」自体が、「共食」という。「一緒に」ということなんです。原島さんがおっしゃったように、猛獣の中では一番弱い人間が、隠れる場所のないサバンナに出ていって新しい生活をするには、集団でやらないとできないですからね。

**原島** 食べることに関連して、「料理をする」というのは、人間の基本なのかなあ。いま、自分で何かをつくるということが非常に少なくなりましたが、料理だけが最後に残ったんですね。自分が食べるだけでなく、ほかの人の分もつくってみんなで一緒に食べる。おもてなしでもありますよね。

**酒井** 鷺田さんの基調講演で「インターディペンデンス」のお話がありました。私たちは、独立と自立に関して、曖昧なとらえ方をしていたと思いますが、小池さんはどのようにと

らえましたか？

**小池** 「自分一人では生きていけない」「つながりの関係の中でなければ、生きていくことはできない」というのは、私は、戦争を体験した世代ですから、そういうところがあるかもしれないですね。親に何かあったら、近所のおばさんに助けてもらえるとかね。うちに問題があった時に、お隣に駆け込んで訴えたりとか。日常的にそういうことがありましたから。そういう意味で、自立ということは、私にとっては戦後教育の言葉だけの問題です。人が生きていくということは、家族の中でのつながりとか、まわりとの関係の中にあるということ、自然に納得してきたようなところがありますね。



### 豊かさとは、自分の一番大事なものを与えること

**酒井** 鷺田さん、いかがでしょうか。それは、人が癒しを求めたり、人に対して癒したりということにもつながってくると思われませんか？

**鷺田** 「癒されたい」というのは、受け身の感覚じゃないですか。私は、もっとポジティブに、与えるほうが大事ではないかなと思います。「インターディペンデンスは、手がいっぱいのこと」って言いましたけれど、英語にすると、「キャン アイ ヘルプ ユー」という感覚です。「おせっかいはしませんけど、僕で役に立つのなら、何か言ってください。何かやましましょうか？」という感覚です。

インターディペンデンスって、閉じた村的な団結ではなく、「もし必要だったら言ってね」という感覚の結びつきがいいんじゃないかなと思うんです。原島さんが、おもてなしということをおっしゃいましたけれども、「キャン アイ ヘルプ ユー」は、与える側の感覚なんです。たとえばホテルという施設も、お客さんの時間に介入はしないけれども、「何かしてほしいことがあったら言ってね」という感覚じゃないですか。誰かに何かをすることで、自分もハッピーになれる感覚が、すごく大事だなと思います。

臓器移植のドナーってありますね。古代サンスクリット語の「ダーナ」が西に行って、

「贈り物」の「ドン」から「ドナー」という言葉になって、これが東に行って、中国から日本に伝わって「旦那」という言葉になったんです。

ドナーと旦那の共通点は、自分の大事なものを人にあげることができる人のことです。臓器は自分の命の礎でしょう。たとえば、腎臓を半分、人にあげるのがドナーです。旦那は、商売人にとって一番大事な、節約して貯め込んだお金を、普段がんばってくれている丁稚さんや番頭さんに、「みんなで好きなだけ食べてこい」と、あげる人です。つまり、自分の一番大事なものを人のために使える人が、旦那であり、ドナーなんですね。

こういう視点から見えていくと、人のお世話をするケアというものがありますが、これは何をあげるのかといえ、私たちにとって一番大事な時間です。誰でも自分のための時間を確保したいじゃないですか。自分が本当にやりたいこと、好きなことができる充実した時間です。しかしケアというのは、「いまからずっとそばにいるから、あなたの思いどおりにしてくれていいからね。私のことがいらないんだったら離れるけれども、もしもいたほうがよかったですとそばにいるからね」って。自分の大切な時間を人にあげることなんです。

介護も介助もそうですね。「おばあちゃん、話したかったら話してもいいよ。話したくなかったら、話さなくてもいい。でも、ずっとそばにいるからね」というのがケアです。子育てというケア、教育というケアもそうですね。

**酒井** それは、安心につながるということですね。

**鷺田** 時間という、ものすごく大事なものを与えることが、ケアということ。我々は、人に自分の大切なものを与えることで、自分から解放される。それこそが「豊かさ」ではないかなと思います。

**酒井** 自分の大切なものを与えるということは、非常に難しいことだと思いますけれど。その点に関して、原島さん、いかがですか？

**原島** ちょっと違った意味なのかもしれないけど。それに関連して、僕が思うのはね、人との関係は、どのくらい無駄な時間を過ごしたかで決まるんじゃないかなと思うことがあるんです。近代は、効率、効率で来てしまっているけれども。でもね、昼間の会議で効率的にやるよりも、夜に一杯飲みながら、2時間も3時間も一緒にいたほうが、絶対いい関係ができるじゃない。そういうものだと思うんです。それが結果として、人と人とのつながりを生むんじゃないかなという気がします。

**鷺田** 恋人がイチャイチャしているのも、非効率的ですけど(笑)。

**原島** あれを効率的にやったら、絶対失敗しますよ(笑)。

**酒井** たしかにそうですね。でも、恋人同士なら、時間をずっと共有してたいですよね。

時間には、親しくなる  
というか、心を寄せ合  
うポイントがあるので  
しょうかね。小池さん、  
この点に関してはいか  
がですか？

**小池** 時間というの  
は、人との関係の中  
では、ほとんど考えたく  
ない要素ですね。友達  
が入院しているんです

けど、お見舞いに行く時間というのは、自分でも愛しい時間を持てたと思えるんです。仕事に追われていても行きたい気持ちになるのは、天から贈られたその人との関係の表れかなと思います。

**酒井** お見舞いに行くということは、支え合う力を出しているということにもなりますよね。鷺田さん、いかがでしょうか？

**鷺田** お見舞いということで思い出すのは、正岡子規の日記です。読んでいてびっくりするのが、とにかく見舞客が多いこと。みんな、食べ物をいっぱい持って来るんですよ。「よくこれだけ食べられるなあ」と。でも、お見舞いって、そういうこと。その人の痛みを代わってあげることは絶対にできないじゃないですか。慰めの言葉をかけても仕方ないとわかっているからこそ、お見舞いに行って気を散らしてあげる。少なくとも、見舞客が来ている時は、病気のことを考えないで済む時間ですよ。気を散らしてあげるというホスピタリティかなと。

**原島** 今日のテーマは「心豊かに生きる」ですが、24時間、心豊かに生きるのは無理じゃないかなと思うんですよ。世の中いろいろありますから。だから僕は、1割でいいかなと。自分の大切な時間をほかの人に与えることも、24時間はできないけれど、1割ぐらい確保することはできるわけです。24時間のうちの1割でいいのかなと。1割が大切なのかなと思っています。無駄な時間を1割ぐらいは確保する。そのぐらいの気楽さがあるといいなと思ったんです。

**酒井** やはり、「心豊かに生きる」ためには、時間との関わりが大きなポイントになってくるのかもしれないね。それと、鷺田さんの基調講演で、「豊かさというのは、深く傷ついたことも含めて、はじめて豊かになる」というところが、私はとても印象的でしたけれど



も。小池さんは、どのようにとらえましたか？

**小池** 鷺田さんのお話の中で一番印象が強いのは、「華やぎ」と「安らぎ」という言葉です。それと、時間について、原島さんから「1割」って聞いて、ちょっとホッとしました。自分が心豊かでないと、人との関係もウソになってしまうところがあると思うんです。自分に「安らぎ」を持っている人が、「華やぎ」に対しても理解を示すことができるのかなと思いました。

**酒井** そうですね。鷺田さん、いかがですか？

**鷺田** 1割って、なかなか大事なことです。1日に1割の豊かな時間を過ごせた日に、幸福を感じるくらいがいい。あまり大きなものを望んではいかんということです。「今日、お昼にいいお茶飲めた」とか、「あの刺し身の一切れ、うまかった」という、幸福を小刻みにするということが、心豊かに生きられるコツなんですって。これ、吉本隆明さんという、亡くなった詩人がおっしゃっています。

それと、もう一つはね、いまの話とは正反対なんです。昔の人は、「国家百年の計」って、よく言っていました。私たちは、いまやっていることを明日の自分の視点から見るとは、孫か曾孫ぐらいが将来見た時、ありがたがってくれるかどうかなんです。「よくぞあの時、やっておいてくれた」と、思ってくれるかという。100年後の世代のことを考えて、いま自分ができる最良のことをしておきたい。同世代の人ではなく、100年先の人を相手にして、その人から見て恥ずかしくない仕事をいまちゃんとしておきたいという、そういう誇りを持つ。100年という大きなタイムスケールで見ると同時に、さっき食べたご飯がおいしかったという小刻みな時間も大切にする。このような振幅が大きい人が、豊かさを味わえるのではないかなと思います。

### 「美しい生き方を考える」シリーズの総括として

**酒井** たしかにそうですね。ところで、あまりにも心豊かな時を過ごしてしまいましたら、終わりの時間が近づいているということを忘れておりました。また、今日は、「美しい生き方を考える」シリーズの総括だということも忘れておまして(笑)。最後に、シリーズ全体のテーマにつながるキーワードがありましたら、一言ずつ、いただきたいと思います。



原島さんからお願いいたします。

**原島** はい。私は、誕生日が来ると、古希になります。そうになると、自分自身のキーワードの中に、「居直り」というのが出てくるんですよ(笑)。前へ前へとやらずに、「マイナスもいいんだ」というね。いい居直りです。それから、最近、何でも責任責任と言われるじゃないですか。もうこの歳になると、何か失敗したら、「死んでお詫びをいたします。少しだけお待ちください」と、言えるんですよ(笑)。なんかそういうね。責任を問われて心が乱れた時に、どこかでそういう居直りがあるのは、心豊かに生きるために重要なかなと思いました。

**酒井** ありがとうございます。では、小池さん、お願いいたします。

**小池** 私は、仕事でアーティストに会うことが多いんです。どのアーティストも非常に多様な資質を持ち、さまざまな性格の方がいらっしゃいます。この仕事をしていると、いろいろな方たちと一緒に生きているんだということを感じます。このことを忘れると、疲れたり、人との関係がうまくいかなかったりすると思うんですね。ですから、そういう意味でも、みんなが自分のことばかりではなく、人から教えられる自分ということを大切にすることが大切だと思います。

**酒井** 本当にそうですね。ありがとうございます。最後になりましたが、鷺田さん、お願いいたします。

**鷺田** 20代から30代の人にアンケートをすると、社会貢献したい人のパーセンテージが意外と高いんですね。みんな、就活はうまくいってないし、楽じゃないのに…。私は、こうした気前のよさを与える自由が社会に浸透してきていることは、希望だと思っています。

我々大人は、少し頑固になって、自分の後ろ姿を与えるというか、それぞれの自分のこだわりを不動のものとして持っていることが大事です。若い人が、「こんなものもあるんだ」「こんなでも生きていける」と思えるように、頑固な価値観を持ち続けて、若者にその姿をさらすことが大事だなと思いました。

**酒井** ありがとうございます



います。本日のシンポジウムのテーマである「心豊かに生きる」、そして「美しい生き方を考える」シリーズの総括を語るには、あまりにも短い時間でごさいます、ここに結論が出るわけではごさいません。しかし、今日のお話、これから私たちが生きていくうえで、何かのきっかけになったり、ヒントになったり、キーワードが見つかったり。そんなことがあったのではないかと思います。

このシンポジウムが、皆さまの心に少しでも残り、そして、生かされることがあれば、幸いでごさいます。お別れの時間となりました。パネリストの皆さまに、大きな拍手をお贈りくださいませ。本日は、公開シンポジウム「美しい生き方を考える」シリーズの第3回、「心豊かに生きる」にお越しいただきまして、誠にありがとうございました。

## パネリスト



小池 一子 (撮影：高木由利子)  
(クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授)

東京都出身。早稲田大学文学部卒業。「無印良品」創業以来アドヴァイザリー・ボード。1983年～2000年日本初のオルタナティブ・スペース「佐賀町エキジビット・スペース」創設・主宰。現代美術の新しい才能を国内外に送り出した。2000年、ヴェニス・ビエンナーレ第7回国際建築展日本館「少女都市」企画・展示監修。2004～2005年、武蔵野美術大学美術資料図書館、及び鹿児島霧島アートの森「衣服の領域 On Conceptual Clothing: 概念としての衣服」展。2012年21\_21DESIGN SIGHT EXHIBITION「田中一光とデザインの前後左右」展ディレクター。2011年～佐賀町アーカイブ(3331Arts Chiyoda)にて現代美術作家のアーカイ

ブ展ほか企画実施多数。

編著書に『三宅一生の発想と展開』(平凡社)、『空間のアウラ』(白水社)、『Fashion - 多面体としてのファッション』(武蔵野美術大学出版局)、『田中一光とデザインの前後左右』(FOIL)など。公益財団法人花王芸術・科学財団 美術部門選考委員。



原島 博 (撮影：中村年孝)  
(東京大学名誉教授)

1945年終戦の年に東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人とのコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心を持ってきた。その一つとして、人の顔にも興味を持ち、1995年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心をもち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞(Gマーク)審査員などもつとめた。

現在は東京大学名誉教授、あわせて女子美術大学(美術系)、明治大学(総合数理)、立命館大学(人文系)の客員教授でもある。公益財団法人花王芸術・科学財団 評議員。

## コーディネーター



酒井 ゆきえ  
(フリーアナウンサー)

1975年フジテレビにアナウンサーとして入社。「ママと遊ぼう!ピンポンパン」の3代目お姉さんを4年間務めた後フリーに。

政治から芸能まで幅広い分野で、テレビ・ラジオの司会、インタビュアー、シンポジウムの司会、講演、執筆と多岐にわたり活動中。爽やかで説得力のある声によるナレーションも多数。

また外国人に日本の文化を広めたいと社団法人日本国際青年文化協会の理事を務め、ボランティアで毎週日本語教室の講師をしている。更に食の探究から利き酒師の資格を持ちオリジナルの梅醤油も作っている。

公開シンポジウム  
「美しい生き方を考える」シリーズ第3回

発行 公益財団法人 花王芸術・科学財団  
〒103-8210 東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10 (花王ビル内)  
TEL (03) 3660-7055 FAX (03) 3660-7994  
編集 公益財団法人 花王芸術・科学財団 事務局  
印刷 トキオ印刷株式会社  
発行日 2015年4月1日